

船を沈める怨霊の鯨

(鹿嶋市青塚・荒井)



静かにたつむり船沈没事故慰霊碑。

参考文献／「日本の伝説37巻・茨城の伝説」今澤文也・武田静彦著（角川書店）／「宮田登日本を語る13巻・妖怪と伝説」宮田登著（吉川弘文館）／「妖怪図説」木本しげる著（岩波書店）

鹿嶋の青塚にある船沈没海難事故慰霊碑。為十九人海死聖普賢新井村三十八人角折村五十七人津賀村十八人寛政十一年正月十一日となっているこの碑は、その昔、鹿嶋で起きた海難事故の後、供養のために立てられたものだといふ伝えられている。

過去最大とも言われた、その海難事故は、江戸時代である寛政十一年（一七九九年）の新年に起きた。一月十一日、鹿嶋からクラジラ海に出た船七隻が遭難し、百二十八人が犠牲者になった。誰も帰らず、遺品も何も無かったという。この悲惨な事故の歴史に、まとも付くかのような伝承が残っている。つんと

流された、荒井のクラジラにだまされた、青塚網箱、持ち出した。この「荒井のクラジラ」は、人々から恐れられた、化け物（妖怪？）だったという。次のような伝説が残っている。

◆ ◆ ◆

昔、「蔵寺」という名の寺があった。その寺の住職は、僧家から集めたお布施を無断で使い込んでしまった。村人たちは住職を寺の池に放り込んで殺した。その後、住職はクラジラに生まれ変わり、その怨霊が次々に船を沈めると恐れられた。観音様の縁日には、天候が良くても、急に曇り出して海難を呼んだという。

筆者は、この伝説を調べた時、車に住む妖怪「海坊主」を思い出した。海坊主は、黒い髪頭で五、六尺の大きな、穏やかな海面が急に波うた、突然現れて船を破壊し沈没させたり、また、その姿を見ても恐怖に陥れるともいわれ、漁師に恐れられている妖怪である。

実は海坊主、昔の人が勝手に妖怪にしてしまった海の生物で、正体はクラジラやイルカ、アザラシなどであるといわれていて、普通に海に生きている妖怪にこそは人間から妖怪扱いされて迷惑に感じない。

◆ ◆ ◆

「荒井のクラジラ」の有名な伝説は、土地の長老や漁師などが語ったことが伝説になったものが多く、実際にその地域で住職殺しがあつたかどうかは定かではない。現実には、ある程度は、鯨漁がかなりの危険を伴う漁であったこと。

慣れた地元の人であつても、相手は大きなクラジラ、常に命の危険にさらされながら漁を行っていたと考えられる。

そのような環境で、事故の犠牲になった漁夫の、やりきれない悲しみや恨みを対峙するために、荒井のクラジラが誕生したのではない。

人々が、悲しみを乗り越えるためには、怨霊クワラの祟りのせいにすれば、自然に対する畏敬の念へつながっている。

本 新しい世界との出会い

食堂かたつむり

小川糸著 ポプラ社 1300円

恋人に捨てられ、生きるすべを失い、さらに声まで失った。10年ぶりにふるさとの村に帰り、倫子が開いた「食堂かたつむり」。食堂を訪れる様々な人たちのために倫子を作る料理は、食べることを意味を改めて問いかけてくれる。大切な命を決して無駄にしてはいけないことは、「食べる」ということだけではなく人との出会いや別れも同じである。

愛木 礼子(鹿児島県立図書館)



編集デスクからのお知らせ

あなたの住む街で、無口な人気者を見つけたら、「わたしのまち」編集デスクへ情報をお寄せ下さい。投稿も受付けています。宜しくお願致します。

〒311-2423

浦安市の出6-17-1

「わたしのまち」編集デスク宛

TEL&FAX0299-66-6667



西郷さん

街で見つけた あなたの近所にも居るかも！

無口な人気者

その⑨：「わたしのお～〇〇〇の前で、泣かないでくださあ～い～♪」（鹿嶋）



鹿島神宮の年間の行事が書かれている大きな看板の横に、ぽつんと存在する石のサッカーボール。

道端からだと「何だかよく分からない球」という印象があります。場所的に、民家の敷地内にあるようにも見えてしまい「本

当に入って行って石碑を見てよいものなのか…」と不安にさせます。

この石碑は「栄光の碑」。正面から見ると、アントラースのマークが入っています。サッカーボールの下の座布団のような台座が、アントラースの格式の高さを表しているかのようです。

とても立派に造られています。お墓のような寂しさを感じるのはワタシだけでしょうか？…気が付いたら手を合わせて拝んでいます。（注意：この石碑は拝むものではありません）

「栄光」という輝かしい名前を持っているが、日陰に存在するサッカーボール。文豪にすると更に寂しい気持ちになります。

今日もサッカーボールは「もっと日の当たる場所へ行きたい」と願いながら、ひっそりとたたずんでいるのです。